

説教 『できるかぎりのこと』 山本 護 牧師
聖書 コヘレトの言葉 7:1~6/マルコによる福音書 14:3~9

「高価な香油を注いだ女」の物語(マルコ 14:3~9)、これまで幾度となく説教して来た。受難の流れの内に位置づけられるが、直前の「イエスを殺す計略(14:1~2)」と直後の「裏切りを企てるユダ(14:10~11)」暗さが、この女の不合理を輝かせている。女の不合理に打たれ、自分のつまらない合理が揺さぶられることを歓迎したい。今までこの場面を分析的に読み、積義的に語った。しかしそれでは、「そこにいた人の何人か(14:4)」と違わないじゃないか。だから今日は、この女のような直観に導かれない。

食事のさなか「一人の女が、純粹で非常に高価なナルドの香油の入った石膏の壺を持って来て、それを壊し、香油をイエスの頭に注ぎかけた(14:3)」。和やかな食事の場は混乱し、怒号も聞こえる(14:4)。私はこれをどう直感するか。いいじゃないか、おもしろいじゃないか、という第一印象。イエスの髪から香油がタラッーと滴り、鼻を突く芳香に食事どころではない。人々は啞然とし、怒り狂い、もったいないと口惜しそう(14:4~5)。そんなハチャメチャな中、イエスは香油を滴らせて「するままにさせておきなさい(14:6)」と悠然と応じた。こんなイエス様だから好きなんだ、と素朴に感ずる。

イエスは「この人はできるかぎりのことをした。つまり、前もってわたしの体に香油を注ぎ、埋葬の準備をしてくれた(14:8)」と言った。確かにそれは葬りの作法に思える(ヨハネ 19:39~40)。それでは、女は埋葬のために、食事をしているイエスにそっと近づいて香油を注ぎかけたのか。いや違うだろう。イエスは埋葬準備だと「理解」しているようだが、女の本意はそうではない。それでは何のために「三百デナリオン以上の無駄遣い(マルコ 14:5)」をしたのか。女自身も、自らの大胆な行為を「理解」していなかったのではないか。もとより女には「売って貧者に施す(14:5)」合理的な慈善など念頭にない。

女の不合理に何を直感して、私は「いいじゃないか」と思ったのか。「この人はできるかぎりのことをし(14:8)」、それが「純粹で非常に高価な(14:3)」行為だと感じた。私は「できるかぎりのことをしない」で、傍観者として「三百デナリオン以上に売って貧しい人に施し(14:5)」たなら有益なのに、と思う。私はそんな自分の合理的思考がうしろめたい。「はっきり言うておく。世界中どこでも、福音が宣べ伝えられる所では、この人のしたことも記念として語り伝えられるだろう(14:9)」。なぜ語り伝えられるのか。世界中の人が「できるかぎりのことをした(14:8)」無名の女に心打たれるから。そして多くの人が、私のように「できるかぎりのことをしない」自分がうしろめたいのではないか。

さらに想像力を働かせよう。女はなぜ「できるかぎりのこと」ができたのか。すべてを使い尽してもいいほどに「愛されている」神の真実を、イエスに感じたのではないか。それがどう香油注ぎの動機づけになるかは分からないが、女が「神の愛」を感じたことは生涯の大事件であった。存在が無視されるほど小さい無名の女が、ただ一人踏み入って、「良識による憤慨(14:4)」と「厳しい咎め(14:5)」の嵐に遭った。これはイエスの受難に与ることではないのか(IIコリント 4:10~11)。周囲は闇に覆われていてもキリストの光がある。私たちを深く見通して、静かに微笑むイエスがここにおられる(マルコ 14:6)。



【おまけのひとこと】

解釈して分かったところで 私のものではない それを生きなければ 私のささやかな経験として 身に刻まれなければ 幸いなことに キリストの愛はどこでも見つけられる 注意してさえいけば